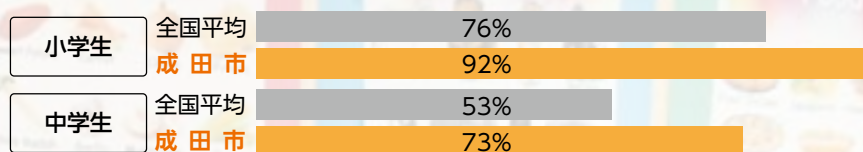




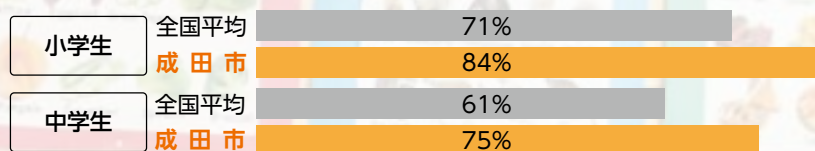
国際空港都市の未来を担う

平成27年度 英語学習に関するアンケート結果

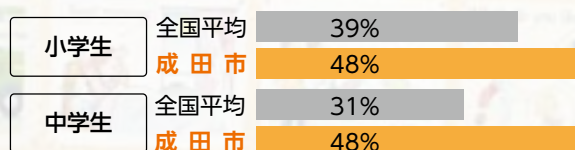
Q1 英語の学習は好きですか



Q2 外国の人と友達になりたい、外国のことについて知りたい



Q3 将来留学をしたい、国際的な仕事に就きたい



成田っ子は英語好き

市では、市内の全ての小中学生を対象にアンケートを実施しました。右のグラフは、それぞれの質問に「そう思う」「どちらかというと思う」と答えた割合を示しています。

Q1では、小中学生共に、国が調査した全国平均を大きく上回りました。

外国への関心も

またQ2・3でも、全国平均を上回っていることから、外国に対する関心の高さがうかがえます。

実際に、卒業生の中には、英語を使って仕事をしている人、外国人との交流を楽しんでいる人、世界に視野を広げて活躍している人がいます。

国では、2020(平成32)年東京オリンピック・パラリンピックと国際化のさらなる進展を見据え、英語教育の見直しに取り組んでいます。

文部科学省が策定した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」では、小学5・6年生で英語を教科化する、中学校の英語の授業は英語のみで行うなどの方針が示されています。この計画が全面実施されるのは平成32年。学校の英語の授業に大きな変化が訪れようとしています。

国際空港都市・成田では

今年9月時点で世界37カ国・3地域・111都市と結ばれている成田空港を擁する本市。「日本一、世界と結ばれているまち」といえます。街中で多くの外国人とすれ違ふことから、世界や英語を身近に感じやすいかもしれません。

市では、そんな立地を生かして英語教育に先進的に取り組んでいます。

日本で起ころうとしている英語教育改革

成田ならではの 取り組み

本市の英語教育の歩みは、平成8年度、成田小学校が文部省(現在の文部科学省)の研究開発学校に指定されたことから始まります。18年度には、市内全ての小学校で英語科がスタート。22年度からは、全ての小中学校が「教育課程特例校」となり、全国に先駆けた英語教育を市全体で実施しています。

標準より多い授業時間

全国の多くの小学校では、英語の授業は5年生から始まりますが、本市では1年生から始まります。

○1～4年生：20分の授業を週2回

○5～6年生：20分の授業を週2回、45分の授業を週1回

中学校では、全国の標準である週4時間の授業に加え、「拡充英語」として1年生は年間15時間、2・3年生は年間18時間行っています。

ALTを全校に配置

市では、外国人英語講師(ALT)を全ての小中学校へ派遣しています。ALTは、学級担任や英語担当教員と共に授業を行います。

児童・生徒は、ALTが話す英語を聞いて発音をまねることで、英語の発音やリズムを身に付けます。また、外国人と接することに慣れることで、物おじせず英語でコミュニケーションを取ろうとするようになります。

ALTを支える 主任ALT

市内の小中学校に在籍するALTは現在48人。出身国や文化価値観、経験年数などは一人一人異なります。

そんな彼らをまとめる役割を担うのが、「主任ALT」。教育委員会に2人配置されています。各校のALTが安心して授業を行えるよう、授業の進め方などについて助言します。

ALTと英語で会話

クラスルームイングリッシュで 英語を日常化



公津の杜小学校
鈴木 晶子先生

授業以外でも英語に触れてもらおうと、学校生活のところどころに「クラスルームイングリッシュ」を取り入れています。これは、あいさつや指示、質問、依頼、激励など、主に英語の授業で使われる表現のこと。例えば、朝のホームルームでのあいさつを「Good morning.」にしたり、整列するときの掛け声を「Make a line.」にしたりしています。みんなの前で発表した児童には「Good job.」と声を掛けるようにしていたところ、今は児童同士で声を掛け合う際にも英語が出るようになりました。英語を使うことは特別ではないと感じてほしいですね。

児童と積極的にコミュニケーション



下総みどり学園
フリケシ バイダー先生

モロッコから日本に来て4年目になります。私も、子どもの頃から学習して英語を身に付けました。経験から、英語を学習する上で楽しむことが大切だと考えています。学校では、児童と廊下ですれ違う際など、積極的に声を掛けるようにしています。親しくなると、休み時間などに私のところに来てくれることがうれしいです。学校の外でも、市内のコンビニエンスストアやショッピングモールなどで児童が英語で話し掛けてくれたことがあり、とてもうれしかったです。また、サッカー部の練習に参加したとき、部員が練習のルールを英語で説明してくれ、成長を実感しました。

先生も勉強しています

市では、英語の授業の質を向上させるための研修会を開催しています。ALT向け、日本人教員向けに、それぞれ4回実施。

中には、ALTが講師を務め、日本人教員が受講というユニークなものも。体験型の研修で、歌ったり踊ったりゲームをしたりしながら、児童・生徒が楽しく学べる授業を考えます。



歌で英語の発音を学ぶ

また、英語版の指導計画や教材の作成に当たっています。

**市独自の指導計画には
1時間ごとの指導案**

小学校の英語の授業、中学校の拡充英語の授業は、市独自の指導計画によって行われています。

市内全校が同一歩調で授業を進められるよう、1時間ごとの指導案が示されているのが特徴です。

市内に勤務する教員で構成される計画作成委員会が毎年見直しが行われ、現場の意見を反映させた計画になっています。

**重視するのは
コミュニケーション**

小学校では、聞く・話すことを中心に学習し、コミュニケーション能力の基礎を養います。また、英語や外国の文化への関心、英語でコミュニケーションを積極的に取ろうとする態度を身に付けます。

中学校では、それまでに学習したことを活用してコミュニケーションを取る力を養います。また、聞く・話す力をさらに伸ばすとともに、読む・書くを加えた4つの力を育みます。



初対面のゲストに果敢にインタビュー(吾妻中)

第2章

chapter 2

授業を見てみよう

実際の授業の様子を紹介します。また、児童・生徒の声を聞いてみましょう。

小学校の授業の流れ

ほとんどの英語の授業は、次の流れに沿って行われます。児童が流れに慣れることで、授業がテンポよく展開されます。

①あいさつ

授業の始まりに、英語で大きな声であいさつをします。

②ウォームアップ

音楽に合わせて歌ったり、英語のリズムに親しんだりします。

③プレゼンテーション

学級担任とALTの英語の会話を聞き、新しく学ぶ表現を学習します。

④アクティビティー

新しく覚えた表現を使ったゲームや、日常の場面を想定したコミュニケーション活動を行います。

⑤あいさつ

終わりのあいさつをします。



じゃんけんの掛け声も英語で(大須賀小)



相手の目を見て質問(成田小)



口の形と発音をまねよう(美郷台小)



浜崎 大地さん

ゲームで勝ててうれしかったです。早くタッチするために、カードに描かれている絵や文字を覚えました。

南 ひかるさん

前に習った「Do you like〜?」との意味の違いがしっかり分かりました。



大須賀小 3年生

「Would you like something to drink (eat)? (何か飲み物 (食べ物) はいかがですか)」を使ってゲーム。先生が注文した飲み物や食べ物が描かれているカードを見つけてタッチします。早かった方のチームが得点。最後まで接戦となり盛り上がりしました。



チームの得点に歓喜



先生が注文したウーロン茶に素早く反応



先生たちが店員と客の役で買い物の場面を上演

美郷台小 1年生

ALTと担任の先生が、買い物の場面を想定した寸劇を披露。「May I help you? (お手伝いしましょうか/いらっしゃいませ)」「Here you are. (どうぞ)」などを使ったやり取りが展開されました。また、果物や野菜の英単語を学び、かるた取りをしました。



札を取ったのは誰かな



こうた 沖本 暁大さん

英語の授業が一番好き。かるた取りでは、2枚取れてうれしかったです。

りこ 伊藤 理子さん

先生たちの話す英語を聞いて、どんなことを言っているのか分かりました。



中学校ではより実践的に

中学校の拡充英語では、それまでに習った英語を活用して先生や友達にインタビューするなど、より実践的に聞く・話す力を身に付けます。また、手紙を書いたり読んだりして、読む・書く力も身に付け、4つの力を総合的に育みます。

吾妻中 3年生

ゲストを招いてインタビュー。アドリブを交えたゲストの返答に対し、言葉に詰まりながらも、単語や表現を組み合わせ、なんとか会話をつなぎました。名前・出身地・趣味などを聞き取り、ゲストをクラスメートに紹介する形式で発表しました。



ゲストをクラスメートに紹介



会話中に身振りも交えて

楽しめた。ゲストに「Great job!」と言われうれしかった。

もっと気軽に話せるようになりたい。

吾妻中のALTではない外国人と話せて少し自信が付いた。



質問に笑顔で答える外国人観光客

鈴木 瑠奈さん

好きな動物やキャラクターなどを尋ねました。同じ質問を返されたとき、英語で答えられました。



糸賀 柊陽さん

最初は話し掛けるのに緊張しましたが、笑顔で答えてくれてホッとしました。英語が通じてうれしかったです。



成田小 5年生

成田山の表参道を歩く外国人に話し掛ける「参道活動」。初めはなかなか話し掛けられませんでした。が、勇気を持って声を掛け、「Where are you from? (出身はどこですか)」「What food do you like? (好きな食べ物は何ですか)」などと質問しました。



応じてくれた人に手渡した記念カード



勇気を持って尋ねました

英語力を伸ばす環境が充実

小中学校の英語教育について研究している、東京家政大学人文学部コミュニケーション学科教授の太田洋さんに、成田の英語教育の強みなどを聞きました。

先進的で画期的 成田の英語教育体制

近年、全国的に、小学校での英語教育に力を入れ始めましたが、成田では、ずっと前から取り組んできました。

英語教育の研究に携わっている者の間では今も昔も注目の的。成田小学校などが行っている参道活動は画期的な取り組みです。

全ての小中学校にALTが配置されていることは十分な強みですが、各学校の専任であることが特に効果的です。子どもたちとの距離が近くなり、授業以外でも接する機会があるのは良いですね。

さらに特筆すべきは、主任ALT。全ての学校を訪問してALTを指導することにより、ALT個人の技量の差を小さくできています。これまで、さまざまな地域で

ALT向けの講義をしてきましたが、成田のALTは向上心が強いと感じました。

市民に根付いた認識 「英語は使うもの」

成田の街を歩けば、外国人を見掛けることは珍しくありません。子どもたちは、「英語は使うもの」という認識を自然に身に付けていると思います。

外国人に出会う機会が少ない子どもたちに、「英語を話せたらいいね」「英語は将来役に立つよ」と言っても、実感が湧きません。成田は、子どもが英語の必要性を感じ、学ぶ意欲を持ちやすい環境にあります。市が英語教育に力を入れるようになったのは、自然といえるかもしれませんね。

成人式で実施したアンケートでは、「これから機会があれば英

語を学んでみたい」と思っている人が81パーセントにも達しました。英語の必要性を感じている人が多い証しです。

暗記に頼らない 社会で使える英語力を

吾妻中学校での授業（8ページ）のように、初対面の人とアドリブで英会話をする実践練習の機会は貴重です。

台本などがなく、英語で会話をしようとする、言いたい言葉がなかなか出てきません。もどかしさを感じるでしょう。すると、知識を身に付ける必要性を実感します。実践練習と知識を身に付けることを繰り返すことは効果的。暗記に頼らず、英文を頭の中で組み立てられるようになります。社会に出て使える英語力を培ってほしいですね。

太田 洋さん

東京家政大学人文学部コミュニケーション学科教授。NHKラジオ「レベルアップ英文法」の講師を務めた経験を持ち、英語教育に関する書籍や研究成果を多数発表している。現在、「成田市小中学校英語教育に関する検討委員会」のアドバイザーと検討委員長を務め、本市の英語教育に深く関わっている。



生徒と英語で会話



生徒によって紹介される太田さん





成田空港で外国人旅行者を案内



培った**経験**を生かして

本市が力を入れてきた英語教育。児童・生徒たちの未来に、どのような影響を及ぼしたのでしょうか。

**成人式会場でアンケート
8割が「役に立っている」**

市では、これまでの英語教育の効果を検証するため、成人式の会場でアンケートを実施しました。

「小中学校で勉強した英語は今役に立っているか」との質問に対し、約8割が役に立っていると回答しました。

その理由として、次のような意見が出ました。

仕事で役に立っている

- 飲食店でアルバイトしていて、外国人に気後れせず接客できる
- 空港で働いていて、外国人の同僚と会話を楽しめる

- ホテルで働いていて、英語を話す、発音がとてもきれいと褒められた

日常のちょっとした場面で使える

- 市内を歩いていて、道を聞かれた際に教えてあげられた
- 電車に乗っていて、空港まで行くにはどうすればよいか聞かれた際に答えられた

英語を理解できる

- 日常会話程度なら問題なくこなせる

- 英語をうまく話せなくても、相手の言っていることは理解できる

英語はコミュニケーションの手段



生徒に発言を促す



大栄中学校 英語科教諭

よしとか
大場 祥孝さん
(成田小卒業)

小学4年生の頃、通っていた成田小学校で英語科学習が始まりました。特に印象に残っているのが参道活動。ALT以外の外国人と話す初めての体験で緊張しましたが、相手が笑顔で応じてくれてうれしかったことを覚えています。

現在は英語を教える立場に。英語はコミュニケーションの手段なので、聞く・話す経験を積むことが大切だと思います。以前、生徒から、英語を使って外国人と話せたという体験談を聞いてうれしくなりました。成田には外国人が多く、学んだ英語を実際に使う機会に恵まれています。せっかく学習したのに使わないのはもったいないので、積極的に外国人に話し掛けてみてほしいですね。

英語の鍛錬と笑顔が不可欠

実家が表参道にある土産物屋で、両親が外国人のお客様と英語で話す姿を幼い頃から見てきました。中学生になると店を手伝うことがあり、授業で習いたての英語を使ってなんとか接客していました。外資系航空会社の客室乗務員が来店することも多く、自然と、空港という場所や航空業界に憧れを抱くようになりました。

現在は空港で、館内施設や地上交通の案内、館内放送などを行っています。外国人のお客様が多いので英語は必須。日々勉強しています。また、働き始めて英語に自信がなかった頃、外国人のお客様から「いい笑顔だね」と言われたことが今でも印象に残っており、笑顔で対応することを心掛けています。

成田国際空港振興協会

きようます
京増 奈都美さん
(成田小卒業)



常に明るい表情で

○英語で書かれた雑誌などが読める

○小中学校で英語をしっかりと学べたため、高校・大学での英語学習に余裕を持って臨めた

外国に目を向ける契機に

○外国の文化に興味を持つきっかけとなった

○外国の文化を理解する助けとなった

○オーストラリアに友人ができた

9割以上が

「ALTがいて良かった」

「授業にALTがいて良かったか」との質問には、94パーセントが良かったと回答しました。「外国人と話すことに抵抗が少ない」「言葉だけでなく、外国人特有の表情やジェスチャーなども学べた」といった意見が出ました。

英語学習の経験が活躍の場をつくる

本市の英語教育を受けた後、その経験を生かして活躍している人が大勢います。今回はその一部を紹介します。

英語との出会い、英語教育の経験から受けた影響、経験を今後にどう生かしていきたいかなどを伺いました。

楽しかったALTとの交流 海外に興味を持つきっかけに

元青年海外協力隊員

ひやま
檜山 愛さん
(神宮寺小卒業)



教室で授業を行う檜山さん

平成25年10月～27年9月、JICA(国際協力機構)の青年海外協力隊の一員として、モザンビーク共和国に派遣されました。現地ですでに英語はポルトガル語のため、派遣前に勉強しました。現地での活動内容は主に、小学校で音楽や美術の授業を行うこと。子どもに教えるのはもちろん、教員向けの講習や、教科書の作成も行いました。

以前からずっと、海外に興味を持ち、海外で活動したいと考えていました。そのきっかけは、小学校でのALTとの出会いです。

ALTが話してくれた、母国の文化、食べ物、学校生活などの話が面白く、海外という未知の存在に、興味を強くそられました。授業以外でも、休み時間などにA



教え子たちと記念撮影

LTに会いに行き、話すことが楽しかったです。もっと仲良くなりたい、もっと英語で話したいと思ったことで、英語の学習が好きになりました。

初めて海外に出たのは大学生の頃。旅行やボランティア活動で、インド、カンボジア、シリアなど9カ国に行き、日本にいたら考えられない貧困や、厳しい環境で生きる人々を見ました。こうした経験もJICAの活動に参加する動機となりました。

現在は、障がいのある子どもの就学前支援に携わる仕事に就いています。日常的に英語を使うことはありませんが、英語の学習は好きで、今でも続けています。

時間ができたら、世界を旅したいですね。

将来は英語を生かした仕事を

成田国際高校国際科

勝又 菜々子さん(成田小卒業)

小中学校で学んだ経験を生かし、「成田弦まつり」などで通訳ボランティアとして活動。表参道で外国人に声を掛け、道案内をしたり、お土産を紹介したりしました。自然に会話ができて自信に。将来は英語を生かして働きたいです。



すらすらと話せなくても伝わる

なごみの米屋飯田町店

鈴木 友梨さん(新山小卒業)

前に勤務していた總本店には、外国人も多く来店。日常的にALTと接していた経験から、落ち着いて接客できました。英語が上手に話せなくても、簡単な単語をつないだり、身振りを使ったりして意思の疎通を図りました。





特集の終わりに

英語の授業を取材しに行くと、児童・生徒の生き生きとした表情がありました。冒頭に出てきた英語学習に関するアンケートの中には、「英語の授業を楽しんでいますか」という質問もあります。

「楽しんでいる」「どちらか」と楽しんでいる」と答えた割合は、小学生93パーセント、中学生82パーセント。英語の授業を楽しく感じるものが、英語で話したいという気持ちを生み、学習意欲のさらなる向上につながっているのではないだろうか。

第3章で取り上げたように、英語の能力や外国への関心を生かして活躍する人が出てきています。

市内全ての小学校で、2週間に1回・20分の英語活動が始まったのが平成11年度。当時の小学1年生は今年度24歳になります。今後本市の英語教育を受けた人が続々と社会に進出し、国際空港都市・成田の未来を担います。